

# 小児救急蘇生法の授業実践の検証

～子どもの命を守るための知識・技術習得に向けて～

三 原 ミヨ子

Verification of Pediatric Emergency Resuscitation Class Practice

Acquiring knowledge and skills to protect children's lives

Miyoko MIHARA

長崎女子短期大学紀要 第51号 令和7年度 別刷

*Reprinted form*

Nagasaki Women's Junior College Annual Report of Studies, 51 : 57 - 62

2026

研究ノート

# 小児救急蘇生法の授業実践の検証

～子どもの命を守るための知識・技術習得に向けて～

三 原 ミ ヨ 子

Verification of Pediatric Emergency Resuscitation Class Practice  
Acquiring knowledge and skills to protect children's lives

Miyoko MIHARA

キーワード：心肺蘇生法・小児・命・授業実践

## I はじめに

保育所や教育施設において、子どもに関連した事故は多様化している。不慮の事故によって死亡する子どもの数は年々減少傾向にあるが、交通事故、溺水、転倒、転落、誤飲、誤嚥、窒息などにより、命を落とす子どもも多い。成長、発達していくにつれて、周囲の物に興味や関心を示し、行動範囲も広がるが、子どもは危険認知の発達の未熟性も事故の要因としてあげられる。

「保育所保育指針」の第3章健康及び安全には、「子どもの健康及び安全の確保は子どもの生命の保持と健やかな生活の基本であり、一人ひとりの子どもの健康及び増進並びに安全の確保とともに保育所全体における健康及び安全の確保に努めることが重要となる」とある。子どもの健康と安全を守るために、保育施設において全職員がチーム力を高め、組織的な行動と対応を図ることが求められている。万が一事故が起こったときに適切な判断を行い、速やかな救命処置・対応ができることで、大切な子どもの命を救うことや重症化を防ぐことへと繋がる。

保育者を目指し学んでいる学生は、「子どもの健康と安全」の科目を一年次後期に履修をする。8回の授業計画の中で第5回目、救急処置及び心肺蘇生法の単元において、JRC蘇生ガイドライ

ン(2020)の小児救急蘇生法の項で提唱されている急変時の対応、小児一次救命処置(医療用BLS)を用いて実技演習を行った。

そこで、本研究では、授業実践を振り返り、小児救急蘇生法についての理解や技術の習得へと繋がったのか、学生の学びを検証し、分析したことを報告する。

「子どもの健康と安全」授業の実際  
表1 「子どもの健康と安全」の授業計画

第1回	オリエンテーション、子どもの健康と保育の環境
第2回	施設の衛生管理・衛生環境・危機管理と災害への備え
第3回	事故防止及び安全対策
第4回	感染症の予防と対策、体調不良や障害が発生した場合の対応
第5回	救急処置及び心肺蘇生法
第6回	個別的な配慮を必要とする子どもへの対応
第7回	保育における保健活動について
第8回	年間保育計画の立案と評価、講義の振り返りとまとめ

## II 研究方法

### 1. 演習までの視聴覚教材による予習

予習として、[日本赤十字社]心肺蘇生とAEDの使い方～JRC蘇生ガイドライン2020対応～動画をGoogle classroomにて学生へ送信し事前に視聴して演習に臨むよう説明。

## 2. 演習前アンケートの調査

[救命講習歴等について質問調査]

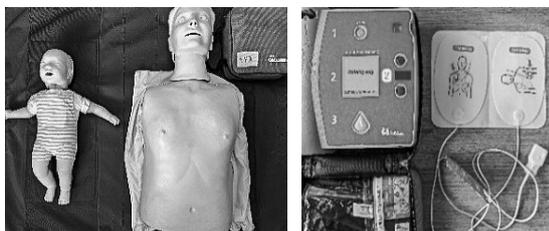
- (1) 今までに、急変時の対応場面や救命処置の場面をみたことがありますか？
- (2) これまでに救急蘇生法（救命講習）を受けたことがありますか？
- (3) 救急蘇生法の講習を受けたことがある方で、手技の記憶は残っていますか？
- (4) 小児の異物除去法について、講習を受けたことがありますか？

## 3. 小児救急蘇生法の概要

- 1) 乳児と小児に対する一次救命処置・AEDの使用方法について DVD 視聴（演習前の導入）
- 2) 異物除去法・反応がある乳幼児における窒息への対応、シミュレーター（乳幼児）を用いた実演の見学（背部叩打法・胸部突き上げ法・腹部突き上げ法）
- 3) 救急蘇生法のシミュレーター（乳幼児）を用いた実演の見学  
見学後、意識の確認→呼吸の有無確認→気道確保（頭部後屈あご先挙上法・下顎挙上法）→胸骨圧迫（乳児の場合：2本指法・胸部包み込み両母指圧迫法）と人工呼吸
- 4) 対象と指導体制
  - ・ 幼児教育学科1年61名  
（Aクラス32名 Bクラス29名）
  - 1コマ（90分）クラスごとに分かれて実技演習
  - ・ 看護師資格を持つ専任教員が講義と救急蘇生法の実技指導を実施
  - ・ 教員による救急蘇生法のデモンストレーション後、編成したグループ（6～7名）

### 成人用シミュレーターと AED

乳児用 CPR 用 マネキン（長崎中央消防署より借用）



に分かれ、1体の乳児 CPR トレーニング用マネキンを用いて心肺蘇生法の体験ができるよう学生はローテーションして演習（一次救命処置アルゴリズムのフロチャートを説明 資料1参照）

- ・ 幼児のモデル人形を用いて気道異物除去法の演習

## III 分析方法

演習後のリフレクションシートの質問項目は、「乳児の救急蘇生法の演習を実施して学んだこと」「自分の課題と対応策」「家庭学習で調べたことや子どもの安全について考えた事」の自由記述とした。

記述内容を精読し、質的記述的分析により意味の表す言葉をカテゴリー分類した。

## IV 倫理的配慮

対象者に本調査の目的、方法を説明し、個人は特定されないこと、得られたデータは研究目的以外に使用しないことを伝え、同意と協力を得た。

## V 結果・考察

### 1. 演習前のアンケート結果

(1) 「今までに急変時の対応場面や救命処置の場面を見たことがありますか？」の質問に「ある」と答えた学生は10名（16%）で「ない」と答えた学生が51名（84%）であった。

「交通事故の場面や高齢者が道端で倒れていた」、「病院で家族の死に直面した」、「体育の授業後クラスメイトが倒れた」と回答があった。

(2) 「これまでに救急蘇生法（救命講習）を受けたことがありますか？」の質問に「ある」と答えた学生が57名（93%）と成人を対象とした講習を受けた学生数は多かった。講習場所として、自動車教習所で受けた20名、自動車教習所・高校の授業で受けた18名、高校の授業で受けた8名、中学校の授業で受けた8名、その他・小学校で受けた3名であった。

(3) 「救急蘇生法の講習を受けたことがある方で、手技の記憶は残っていますか？」の質問に

表2 救急蘇生法の演習を受講した学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容	記録単位
乳児と成人の救急蘇生法の違い	胸骨圧迫の方法の違い	乳児と成人の胸骨圧迫の違いを知ることができた (乳児は2本指法で実施すること)	28
	胸骨圧迫の力加減の違い	胸骨圧迫の位置を確認、圧迫する力加減が難しい 乳児の身体の発育状態や圧迫の仕方 圧迫の深さやテンポを一定に保つことが難しい	26
	人工呼吸	人工呼吸が難しく、肺が膨らまなかった(気道確保の仕方) 人工呼吸を行うことへの抵抗感	7
子どもの命を守る重要性	子どもの命を守ることを最優先	子どもがどんな状況にあるのか、急変時の対応を適切に行い、命を救いたい 冷静な判断力が必要	20
	乳児の観察、反応の見方	乳児は足の裏をたたいて反応を確認。脇を刺激して反応を見ること 呼吸の見かた	11
保育者としての責務	いざという時に落ち着いて行動がとれること	実際、急変した場面に立ちあつた経験がない。不安で自分から動くことができないと思う。 自信を持って行動がとれる技術が必要	5
		焦って手技がわからなくなり、パニックになるかもしれない 落ち着いて冷静に対応できるようにしたい	8
		乳児は大人と違い、どこが苦しいのか訴えることが困難 園生活において子どもの様子観察、見守りをしっかり行うこと	4
	保育者としての責任感	演習での学びを今後へ活かしていきたい	8
		子どもの命を守るための行動と役割を果たすこと	10
救急蘇生法の継続的学習の必要性	救急蘇生法の知識・技術の未熟さ	救急蘇生法の正しい知識と手順の把握 実技演習の大切さ	20
		シミュレーションや定期的なトレーニングが必要 ロールプレイングや現場に即した訓練 反復学習(教科書や資料、動画の視聴)	15
		乳幼児の救命講習を受けたことがなく不安。手技の自信がない (救命講習は自動車学校や中学校、高校の授業で受講したことがあるが、成人の救急法経験のみ)	10
AEDの使用方法	AED操作の習得	AEDの正しい使い方を理解すること。乳児の場合のパッドの貼り方	9
		119番通報、AEDの依頼の仕方	4
		急変時、周りに助けを求めることの重要性	4

小児・乳児の救急蘇生法の実技演習の様子



反応の見方・人工呼吸のデモンストレーション



2本指法による乳児の蘇生法と背部叩打法

事後学習・安全について考えたこと  
(学生の記述より一部抜粋)

「子どもの安全」について、深く考えるきっかけとなりました。救急蘇生は、命を救う最後の手段であり、その前に事故を起こさない環境づくりが何より重要だと感じました。
保育者は、常に子どもの視点に立ち、「これで安全かな？」と一歩先を考えて環境を整えることが大切だと思った。子ども一人ひとりの命を守る責任を自覚して行動できる保育者を目指していきたい。
事故を未然に防ぐ環境づくりと子どもの行動を観察し、一人ひとりの安全を確保しながらかかわっていく姿勢を大切にしていきたい。
保育の専門職になる私たちが、事故の種類と原因を理解しておくとともに子どもの身の回りの環境を整備して、事故を未然に防ぐことを心がけたい。いざというときにも命を守る人になりたい。
緊急時は、保育者の判断が子どもの命を左右するため、日頃から冷静に行動できる訓練を行っていくことが重要だと思う。
乳幼児の急変や異常に気づいて、すぐに対応できる力、観察力、判断力を身につけていきたい。
注意していても子どもは、まだ危険管理能力が十分に備わっておらず、予想外の動きをして、危険につながることもあり、安全を守ること、環境を整えていくことが大切だと感じた。
AEDの操作や心肺蘇生法を自信もって行うことで、一人でも多くの子どもの救うことができると思う。
自分の行動一つひとつが命を救えるか救えないかという大きな責任になると感じた。
子どもの安全について考えたことは、いつ、何があっても助けられる状態にいるようにすることが大事だと感じた。自動車学校で成人の胸骨圧迫は習っていたが、声かけや順番など忘れていたので、定期的に演習をしたり、保育者同士の連携をうまく行えるようにすることが大切だと思った。

対し、「はい」が48%「いいえ」が52%であった。

(4)「小児の異物除去法について、講習を受けたことがありますか？」の質問に対し「ある」が11%、「ない」が89%の割合で小児を対象とした救命処置、急変時の対応の受講者は少ないことがわかった。

演習の学びについての調査票回収率は、受講した学生61名(100%)であった。学生の記述内容から記録単位として抽出した結果、5カテゴリ、9サブカテゴリが形成された。カテゴリには「乳児と成人の救急蘇生法の違い」「子どもの命を守る重要性」「保育者としての責務」「救急蘇生法の継続的学習の必要性」「AEDの使用法」があげられた。救急蘇生法の演習を受講した学生の学びの様相は表2に示す。

「乳児と成人の救急蘇生法の違い」は、〈胸骨圧迫の方法の違い〉〈胸骨圧迫の力加減の違い〉〈人工呼吸〉の3サブカテゴリから構成された。

乳児は2本指法で蘇生を行うことや1分間に100～120回のテンポで強く、速く、絶え間なく行うことを学んだ。胸骨圧迫の位置や圧迫する力加減の難しさを実感した学生が多くみられた。人工呼吸については、教員のデモンストレーション後、肺が膨らむ経験を行ってもらいたかったが、ためらいや抵抗感を感じている様子がみられた。乳児の救急蘇生法の技術のポイントを押さえて実施できるスキルを身につける必要があると考える。

「子どもの命を守る重要性」は、〈子どもの命を最優先する〉〈乳児の観察、反応の見方〉の2サブカテゴリから構成された。子どもがどんな状況場面、状態にあるのか、子どもの観察、反応の見方は、両方の肩や足の裏を軽くたたいて反応を確認すること、急変時の対応や適切な処置ができ、子どもの命を救いたいという思いが感じられた。

「保育者としての責務」は、〈いざという時に落ち着いて行動がとれること〉〈保育者としての責任感〉の2サブカテゴリから構成された。これまでに救急の場面を見た事がある学生は16%と少なく、実際に子どもが意識を失った場面や交通事故、大きな怪我の場面を見た事がないため、不安で自分から動くことができないと思う、焦って手技がわからなくなりパニックになってしまうかもしれないという記述があり、状況を見て冷静に判断する力や対応力が必要になること、保育者としての役割として子どもの命を守るための行動と役割を果たすことの大切さを感じていた。

「救急蘇生法の継続的学習の必要性」は、〈救急蘇生法の知識・技術の未熟さ〉のサブカテゴリがあげられた。自動車学校や中学・高校での授業で成人の救命講習を受けた学生93%と高かったが、乳幼児の講習の経験はなく、成人の救命講習の手技の記憶が残っていると答えた学生は48%であった。しかし、心肺蘇生法の手技の自信がなく、正しい知識、技術をもって行動しないと危険に繋がること、演習を行って人命救助の大切さを改めて感じた、シミュレーションや定期的なトレーニングが必要、ロールプレイングや現場に即した訓練を行っていくこと、教科書や資料、動画

を見て反復学習を行う必要性を感じている学生が多くみられ、継続して学んでいくことが重要だと考える。昨年度からの授業改善として、演習前に日本赤十字社の心肺蘇生と AED の使い方についての動画を、Google classroom にて学生に配信し、予習課題として動画の視聴をして、実技演習に臨んだことは、効果が得られたのではないかと考える。

「AED の使用方法」は、〈AED の操作の習得〉のサブカテゴリーがあげられた。急変時、周りに助けを求めること、119番通報、AED の依頼の仕方、成人と乳児の AED のパッドの貼り方の違いを知り、AED の正しい操作方法ができることの重要性を感じていた。演習後の学生の学び、アンケート調査から、救命処置の講義内容の理解度は 80%、小児・乳児の救急蘇生法に対する満足度は 83%と高値を示していたが、カテゴリー分類した内容からも保育中に急変やショック状態、心停止が起こった場合、「焦って手技がわからなくなり、救命処置ができる自信がない」「人工呼吸が怖い」「その場で冷静な判断ができない」「救命救急法に関する知識不足」「不安」等の回答もみられ、課題内容である。学生は事故防止対策や安全に対する重要性、危機管理意識はあるが、救急の医学的な知識や小児の救急蘇生法講習についての技術経験が少ない。本学は保育者養成課程の短期大学で、科目履修や限られた演習時間の中で、救急法の技術を習得するには難しい面もあるが、在学中より乳幼児の特徴を踏まえた救急蘇生法の実技演習や反復学習により、実践できる力を身につけ、学生の自信に繋がるような技術習得の方法、教育的関わりが必要だと考える。

## Ⅵ まとめ

- 1) 小児・乳児の救急蘇生法の授業実践、実技指導により、演習後の学生の学びの検証を行った。
- 2) 在学中より乳幼児の特徴を踏まえた救急蘇生法の知識・スキルを身につけておくことが求められる。
- 3) 救急蘇生法の知識・スキルの習得は、子どもの大切な命を守る重要な保育者役割である。

## おわりに

保育・教育施設において、子どもの健康や生命の安全を守り、子どもに携わっていくことは保育の専門職者として大切な役割を担う。注意して観察をしていても成長・発達が未熟な子どもは、不慮の事故や怪我を起こすことがある。子どもの急変や窒息、怪我等の状況場面に遭遇した際に、応急処置の知識や一次的救命処置のスキルを身につけることで、子どもの命を救う行動をとることができるようになるのではないだろうか。学生に講義・演習を展開していく中で、子どもの観察の仕方、救急蘇生法の知識・技術の習熟度は個人差もみられたが、学びも大きかったと感じた。今後も臨床現場や看護師養成課程における教員経験を生かし、小児の特性や急変時の対応が保育現場で活かすことができる技術、専門的な知識を身につけられるよう、さらに授業力を磨いていきたい。

今回は、小児の救急蘇生法の授業実践を通して学生の学びを検証したが、保育施設における救急対応や事故防止の現状について、調査や研究を行っていきたい。

## 引用・参考文献

- 1) 厚生労働省 (2019) 「保育所保育指針」フレーベル館 p296
- 2) 厚生労働省 (2019) 「保育所保育指針」フレーベル館 p307~308
- 3) 日本蘇生協議会 (2021) JRC 蘇生ガイドライン2020 医学書院
- 4) 松田博雄 金森三枝 (2019) 子どもの健康と安全 中央法規出版
- 5) 横田俊一郎 山本淳 湧水理恵 (2023) 小児科でよく見る症状・疾患ハンドブック 照林社
- 6) 池西静江 石東佳子 藤江康彦 (2019) 学習指導案ガイダンス 照林社
- 7) 磯部健一 (2017) 子どもに関わる職種を希望する非医療系学生に対する小児一次救命処置演習の検討 高松大学研究紀要69号
- 8) 前林英貴 (2022) 保育・教育職を目指す学生を対象とした小児救命救急法についての考察-子どもの生命を守るための知識とスキル 島根大学松江キャンパス研究紀要第61号19-26
- 9) 垂髪あかり 谷崎若葉 (2025) 子どもの命をまもるために 保育者・教育者としてできること-学校園における救急対応の現状と課題- 鳴門教育大学研究紀要第40巻

資料1. 一次救命処置 (BLS) アルゴリズム

